晩華本『春香歌』

山田恭子　訳

歌詞

春香歌 二百句 押支韻

廣寒樓前烏鵲橋吾是牽牛織女爾人間快事繡衣郎月老佳緣紅
粉妓龍城客舍東大廳是日重逢無限喜南原冊房李都令初見春
香絶代美三郎愛物比君誰二仙瑤池淑香是吾年二八爾三五桃
李芳心媚春晷晴莎南陌欲抽綠牧丹東籬方綻紫繁華物色帶方
國是時尋春遊上巳紅羅繡裳草邊曳白紵輕衫花際披清溪夕陽
蹴波鷲碧桃陰中香步蛙姑山處子惹香澤玉京仙娥鳴佩玘蘭膏
粉汗洗浴態萬北寺前春水瀰玻璃小渚顧影笑雪膚花貌清而頻
慇懃腰下怕人見水面嬌態蓮花似香風一陣綠楊岸復上鞦韆誇
妙技青鸞飛動紫羅繡百尺長繩紅纖纖江妃踏波一身輕月娥乘
雲雙足跂尖尖實襪似苽子衝落枝邊高處藥桃花團月掩羅裙萬

晩華集 卷之三 十四

晩華本『春香歌』（清節書院本：李樹鳳『晩華本春香歌 외龍潭録』収録）

朝鮮古典文学の中で最も有名かつ傑作として広く知られているのが、『春香伝』である。また『春香伝』は多くの人々によって改作、伝承され、その異本[1]はパンソリを初めとして、漢文、古典小説、歌辞[2]、戯曲など、多岐のジャンルにおよび、数百種以上になる。これらの『春香伝』の異本中、作者と創作年代が明らかで、かつ最も古いのが晩華本『春香歌』である。

晩華本『春香歌』の作者は、晩華柳振漢（ユジナン）（1711 ～ 1791）で、英祖代に忠清道の木川に住んでいた。1753 年に故郷である湖南の山川や文物を見て、翌年の 1754 年（英祖 30）に漢詩作品『春香歌』を完成させた。[3]内容は七言の全二百聯、則ち二千八百字にも及び、十八世紀半ば、湖南地方で伝承されたパンソリ『春香歌』の内容を反映させている点で注目に価する。[4]そのあらすじをまとめると次のようになる。

> 全羅北道、南原府使の息子である李道令（イドリョン）は広寒楼に遊んだ際、美しい妓生春香（キーセンチュニャン）を見染め、夫婦の契りを交わす。しかし李道令の父が都に上京することになり、二人は離別する。新任の卞使道（ビョンサト）は悪政を行い、春香に夜伽（よとぎ）を強いるが、春香はこれを断固拒否し投獄される。一方、父に従い上京した李道令は科挙に合格し、暗行御史（アメンオサ）[5]として南原に赴き、春香を救出する。

以上は、『春香伝』の多くの異本で共通する内容である。晩華本『春香歌』の特徴としては、李道令十六才、春香十五才と明記されており、春香が三巳日（サムジンナル）（陰暦三月三日）の遊びに出て、萬北寺（マンブクサ）の前の小川で水浴びをする点、不忘記（誓紙）をもらう点、春香が獄に入れられ「鏡破花飛」の吉夢を見る点、春香に貞烈夫人の教旨が下りる点などが挙げられる。

晩華本『春香歌』は、作者と創作年代が明らかで、かつ最も古い点、『春香伝』の舞台となる湖南地域のパンソリ内容を伝えている点で、『春香伝』の原作者や作品の原型を考える際、非常に重要な位置にある作品といえる。しかし日本においては、現在に至るまで、小説や戯曲としての『春香伝』が多く翻訳され、晩華本『春香歌』が翻訳されることはなかった。[6]したがって、本稿は晩華本『春香歌』の初の日本語訳であり、今後の日本における『春香伝』の研究に大きく寄与するものと考える。

韓国における晩華本『春香歌』の研究は 1976 年、金起東（キムギドン）によって初めてなされた。[7]しかしこれは概要だけを紹介したに過ぎない。1990 年代以降には、ようやく全編の朝鮮語訳が試みられた。[8]本格的な研究としては 2002 年、柳浚景（リュウジュンギョン）の晩華本『春香歌』がある[9]。また 2010 年には、晩華本『春香歌』の現存する二つの異本を比較し、定本化の作業も進められた[10]。

晩華本『春香歌』は作者である柳振漢の『晩華集』に収録されているが、現存する『晩華集』は一蓑本[11]と清節書院本の二種類がある。一蓑本は一蓑方鍾鉉が所蔵していた筆写年代不明の本で、清節書院本は晩華の六世に当る柳濟漢が1989年に石印本として刊行したものである。一蓑本は2巻1冊で清節書院本は3巻1冊となっている[12]。本稿では清節書院本を底本に、異同のある場合は一蓑本も参考にした。また本稿の日本語訳をするに当たって、晩華本『春香歌』の朝鮮語訳や朝鮮語の注、その他の研究論文などを参照した。[13]

歌詞

春香歌	二百句[14]押支韻[15]	
1	廣寒樓[16]前烏鵲橋	広寒楼前の烏鵲橋に、
2	吾是牽牛織女爾	我は牽牛、汝は織女。
3	人生快事繡衣郎[17]	人間の快事よ。暗行御史は、
4	月老佳緣紅粉妓	月下老人の佳縁にて紅粉妓と結ばれた。
5	龍城客舍東大廳[18]	龍城館の東大庁に、
6	是日重逢無限喜	この日に再び逢う無限の歓びよ。
7	南原冊房李都令	南原冊房の李都令が、
8	初見春香絶代美	初めて見る春香のまたとない美しさ。
9	三郎[19]愛物比君誰	玄宗の楊貴妃でさえ、これに比せられようか。
10	二仙[20]瑤池淑香是	李仙と瑤池の淑香のごとく。
11	吾年二八爾三五[21]	我は十六、君は十五。
12	桃李芳心媚春晷	桃李の芳しい心は春光に媚びる。
13	晴莎南陌欲抽綠	南の畔には芝が青々と繁り、
14	牧丹東籬方綻紫	牡丹は東籬で紫に花開く。
15	繁華物色帶方國[22]	物色も華やかな帯方国、
16	是時尋春遊上巳[23]	時はまさに上巳の節句、春を楽しみ訪ね歩く。
17	紅羅繡裳草邊曳[24]	紅の絹のチマは草をかすめ、
18	白紵輕衫花際披	白紵の薄い衫は花を広げたよう。
19	清溪夕陽蹴波燕	清い清流、夕焼け、水面を蹴っていくツバメ、
20	碧桃陰中香步蛙	碧桃花の陰の中に蛙がピョンと飛ぶ。
21	姑山處子[25]惹香澤	麻姑仙女のように姿形が芳しく、
22	玉京仙娥[26]鳴佩玘[27]	月の仙女のように美しいノリゲが鳴り響く。
23	蘭膏粉汗洗浴態	蘭蕉脂粉で汗を洗うその沐浴の姿、

24	萬北寺前春水瀰	萬北寺の前、春の水が流れる。
25	玻璨小渚顧影笑	琉璃のような清流に自分の姿を映しては笑い、
26	雪膚花貌淸而頍	雪のように白い肌、花のような顔に、美しい飾り。
27	慇懃腰下怕人見	腰の下を他人が見るかと恐れ、
28	水面嬌態蓮花似	水面で遊ぶ嬌態は蓮の花のよう。
29	香風一陣緣楊岸	芳しい風に柳がそよぎ、
30	復上鞦韆[28]誇妙技	またブランコの上で妙技を誇る。
31	青鸞飛動紫羅繡	鴛鴦(おしどり)の模様が紫(あか)のスカートの上で踊り、
32	百尺長繩紅纚纚[29]	百尺もの長い縄も紅くゆらゆら。
33	江妃[30]踏波一身輕	江妃が波を踏むように体も軽く、
34	月娥乘雲雙足跂	姮娥が雲に乗り、両足を曲げるよう。
35	尖尖寶襪[31]似苽子	すっととがった足袋(ポソン)は、瓜のごとく、
36	衝落枝邊高處蘂	延びた枝に、はらりと落ちる花しべのよう。
37	桃花團月掩羅裙	桃の花のような腰がスカートの下にふんわりと覆われ、
38	萬目春城皆仰視	春城の皆が仰ぎ見る。
39	紅樓十載所未見	紅楼、十年ぶりに見たものと、
40	男子風情潛惹起	男子の春情が密かにわき起こる。
41	翩翩青鳥[32]乍去來	青い鳥が行ったり来たり飛び回り、
42	整頓衣裳端正跽	襟を正し、美しくひれ伏す。
43	櫻桃花下捲簾家	さくらんぼの花の下に簾(すだれ)を捲(ま)いた家があり、
44	女曰無遐男曰唯[33]	女が遠くありませんというと、男は分かったという。
45	鶯嗔鷰猜路如絲	鶯燕(とり)がさえずる道は糸の如く細く、
46	步踏溪邊靑白芷	二人は白芷(はなうど)のしげる渓流ほとりを歩んでいく。
47	窓開紅杏碧梧庭	窓を開くと赤い桃の花と青い桐の庭、
48	屛畵靑山綠水沚	屛風には青山緑水が描かれている。
49	靑帷紅燭洞房[34]中	青い帳(とばり)に紅い蝋燭(ろうそく)の灯る部屋の中に、
50	鏡臺粧奩何櫛枇[35]	鏡台と化粧箱が何ゆえずらりと並んでいるのか。
51	肴陳蔚觴爛登盤	酒の肴に美しい盃を膳に載せ、
52	酒熟壺春新上篚	酒は熟して壺にあり、ちょうど出したばかり。
53	琉璃畵盞瑚珀臺	瑠璃盃を琥珀の台に載せ、
54	勸勸薑椒香蜜餌	生姜、山椒、薬菓を何度も勧める。
55	花牋書出不忘記[36]	花箋紙に不忘記を書かせておいて、
56	好約丁寧娘拜跪	好(よ)き約束を丁寧に、娘も拝してひざまずく。

57	人間今夕問何夕[37]	この世の今夕(こよい)は何時(いつ)の夕か、
58	大禹塗山辛壬癸[38]	夏禹(かう)氏が塗山(とざん)の婿に行った壬(じん)、辛(しん)、癸(き)の時だと。
59	鴛衿栢枕次第鋪	鴛鴦(えんおう)の衾(ふすま)を広げ、柏(かしわ)の枕を置き、
60	繡帶花帷雜絲枲	繡帶に花帷(はなぎぬ)は綿の糸で繋がれている。
61	三更釵股撲灯火	真夜中に燈燭(とうしょく)を消し、手足を絡(から)め、
62	楚臺香雲浮夢裡[39]	楚懐王が巫山神女と情を交した如く、夢中で恍惚とする。
63	吾心蝴蝶繞春花	吾が心は蝴蝶となり、春の花に戯れるようで、
64	爾意鴛鴦逢綠水	汝の心は鴛鴦となり、緑水に逢ったよう。
65	童年風度[40]闊手段	若々しい風采だが、風流をよくし、
66	欲表深情何物以	何でもって深い情を表そうか。
67	菱花玉鏡打撥金[41]	金で装飾した菱花玉鏡(りょうかたまかがみ)、
68	竹節銀釵倭舘市[42]	倭館市の竹櫛と銀簪、
69	烏銅[43]鐵柄統營刀	烏銅鉄柄(うどうてつがら)の統営刀、
70	紫紬雲頭平壤履	紫紬のヒールの平壤靴。
71	投之贈之小無惜	これら全てを捧げても、少しも惜しくない。
72	復恨金錢無億梯	金銭のないことだけが、また恨みだ。
73	男兒口情娶前妾	男児の口情(くちぐせ)、娶前(しゅぜん)の妾。
74	内衙[44]時時誇伯娣	家の姉にもしばしば自慢する。
75	長長情緒絡兩身	長い春の夜に二つの身が絡み合い、
76	笑說喬林縈葛藟[54]	笑い戯れ、喬林(きょうりん)の葛藟(つたかづら)が結び付いたよう。
77	春瓜苦滿[46]北歸期	任期も終わり、帰るもつらく、
78	此日遽然離別禩	この日、突然の離別にあたふたする。
79	紅樽綠酒不成歡	赤い酒甕(さかがめ)、清い酒も喜ばしからず、
80	一曲悲歌騰羽徵[47]	一曲の悲歌を寂しげに歌う。
81	長城忍忘葛姬眼	長城の妓女の目を偲び忘れんとし、
82	濟州將[48]留裵將齒	済州道の裵裨将(ペ ピ ジャン)が歯を抜いて約束したよう。
83	郎言別恨割肝腸	道令(ドリョン)は「別れの恨(うらみ)は断腸の思いである」といい、
84	女道深恩銘骨髓	春香(チュニャン)は「深い恩恵が骨髄にまで銘じる」と答える。
85	離筵相慰復相勉[49]	離別の宴にお互い慰め合い再会を約束し、
86	爾言琅琅吾側耳	汝の言葉が我が耳に響くよう。
87	今歸洛陽好讀書	京に帰ったら読書に励み、
88	立身明廷[50]終出仕	官吏として立身した後、出仕なさってください。
89	玆州太守或不能	この州の太守はだめでも、

90	此道監司猶可擬	この道の監司ほどにはなれるでしょう。
91	分明他日好風吹	他日良き風が吹くでしょうから、
92	復墾陳田春草薙	また昔の田を開墾し、春草を刈りましょう。
93	臨分更有惜別意	別れに臨みて、さらに離別を惜しむ意があり、
94	戯談層生南俗俚[51]	戯談が積り『黄鶏詞』になることだろう。
95	方壺[52]大海涸生塵	方丈大海の水が涸れて塵が生じ、
96	白頭高山平似砥	高い白頭山が平らなること砥に似る。
97	屛風畫鷄拍翼鳴	屛風に描かれた鶏が羽ばたきをして鳴けば、
98	公子歸船門外艤	公子の船が門の外に帰り着くのか。
99	花樓春日上馬遲	花楼の春日、遅れながら馬に乗り、
100	回首蛟龍山[53]碨礧	ふり返るに、蛟龍山に岩がごつごつ。
101	征鞭不促北去路	北へいく道では鞭を打って急がせることもなく、
102	歎息斜陽踰瑟峙[54]	斜陽に歎息し、瑟峙峠を越えていく。
103	惘然歸坐洛中宅	京の家に帰って呆然と座り、
104	注目南天窓毎闔	南の空を見つめながら、窓はいつも明けておく。
105	音容黯黯斗峙[55]雲	いとしい音容は暗澹とし、斗峙峠の雲、
106	書信茫茫漢江鯉	書信も遥か彼方で定かならぬ、漢江の鯉。
107	紅閨[56]後約恐或晩	閨房での約束が遅れるかと恐れ、
108	毎日長安[57]開墨壘[58]	毎日長安にて試験勉強をする。
109	風騒[59]句裡問宋玉[60]	風騒の句中で宋玉に問いかけ、
110	史記篇中談李悝[61]	史記の篇中で李悝と談じる。
111	春塘[62]二月謁聖科	春塘で二月に謁聖科を受け、
112	身作龍門九級鮪	一気に龍門に登る。
113	東坡文體右軍筆	蘇東坡の文体、王羲之の筆跡で、
114	一天先場[63]呈試紙	科場にて最初に試紙を提出した。
115	文臣及第壯元郎[64]	文科及第、壯元と。
116	御酒恩花[65]榮莫比	御賜酒と御賜花はこの上ない名誉。
117	香名藉藉翰林[66]召	芳名も広まり、翰林に召され、
118	教坊[67]群娥歌學士	教坊の妓生たちが群をなし、翰林学士と歌う。
119	芸臺[68]華職拜正字	芸台の良き職、正字を拝し、
120	玉署[69]清班[70]登校理[71]	玉堂の清官、校理に登る。
121	平生所願輒如意	常日頃の願いが、そのままかない、
122	特除湖南新御史	湖南の新御史として特別に任命された。

123	延英殿[72]下肅拜歸	宮殿で王様に謹んで拝をして帰り、
124	敦化門前啓行李[73]	敦化門(トンファムン)の前で、旅支度を始める。
125	征驂[74]躍出罷漏[75]頭	夜間通行禁止解除の合図とともに馬車が出発、
126	此去南州幾百里	ここを去って、南原までは幾百里。
127	陽城稷山短長亭	陽城(ヤンソン)と稷山(チクサン)を経て、短長亭に至り、
128	草浦恩津深淺涘	草浦(チョポ)と恩津(ウンジン)の川を渡り行く。
129	完山客舍一宵枕	完山(ワンサン)の客舍で一夜の夢、
130	念外靑蛾幾羅綺	ふと華やかな衣装の美女が現れる。
131	公中得私此行色	公務中、我に帰り、春香を思い出し、
132	地漸南時人漸邇	南原に近づけば、恋しい君にも近づく。
133	呼艟急渡五院[76]溪	船を呼び、急いで五院(オウォンゲ)溪を渡り、
134	喚酒忙過獒樹[77]坻	酒を煽り、慌ただしく獒樹(オス)を過ぎていく。
135	潛行弊衣等范叔[78]	よれよれの暗行の身なりは范叔(はんしゅく)のごとく、
136	陸路無車山着欓	陸路にも車がなく、山では雪車に乗る。
137	官門消息問來人	官門の消息を来る人に問うに、
138	有一田翁閑負耜	老いた農夫がのんびりと田を耕している。
139	新官城主太狂妄	新長官さまはひどく威張り散らし、、
140	其也佳人蟄萬死	我らが春香を牢に閉じ込め、殺すとか。
141	貞心守節以爲罪	貞心守節が罪となり、
142	一月官庭三次箠	ひと月の間に官庁で三回も鞭打たれたとか。
143	緣誰將作獄中鬼	誰故に獄中の幽鬼となるのか、
144	可憎當年總角氏	憎むべきはあの時の若造(チョンガー)さ。
145	推之一事可知十	一事を推して十を知るべし、
146	闔境[79]之民同有庳	地域内の百姓たちも、皆酷い目にあっている。
147	輪囷我膽强自制	沸々とする我が心を強いて自制し、
148	睨視月梅心暗訾	月梅(ウォルメ)は睨みてさぞやそしることだろう。
149	花間柳邊路已慣	花の間の柳道はかつて慣れた所、
150	先訪粧閨舊基址	まずは懐かしき春香の家を訪ねる。
151	紗窓粉壁若箇[80]邊	美しい閨房の壁は、どの辺りであったか、
152	喚出阿娘老阿嬭[81]	春香の老母を呼び出す。
153	棲遑[82]蹤跡使人侮	寄る辺もないみじめな姿は人を侮(あなど)らせ、
154	老婦尖脣如鳥觜	月梅の口が鳥の嘴(くちばし)のようにとんがった。
155	公然愛女納圜扉[83]	いとおしい娘が牢屋に捕らわれたというのに、

156	到此無人供滫瀡[84]	ここに至って誰も助けてくれない。
157	簫條數口不自糊	残された家族の口に糊することも難しく、
158	或向隣家掃糠粃	近くを回って物乞いしていたのだ。
159	奇祥泣說虺蛇夢[85]	奇異な蛇の夢をみて得た娘と涙ながらに説(の)べ、
160	至情難堪牛犢舐[86]	大切に育ててきた娘への情は堪えがたい。
161	聞來不覺鼻孔酸	聞くに、思わず鼻がツンとする。
162	是誰之愆吾所使	これは誰のためといえば、私のせいだ。
163	無情有情獄門外	情ありや、無きや、といったところで獄門の外、
164	相面今宵第往矣	顔を見るなら、今宵行かねば。
165	鶉衣鷃冠[87]一乞人	ぼろぼろの服、粗末な冠、まるで乞食のよう、
166	局束長腰行骫骳	柱に手をかけ、長い腰を屈(かが)ませる。
167	徘徊門隙喚春香	獄門を徘徊し、扉の隙間から春香やと呼ぶと、
168	對立黃昏摻玉指	夢中なのか、玉指をとらえ立ちすくみ、
169	凄凉身世爾何故	あわれな身の上、これはなんとしたことか。
170	落魄行裝吾亦耻	落ちぶれた身なり、吾もまた恥ずかしき。
171	娉婷[88]弱質只存殼	美しくもたおやかな性質、ただ殼だけが残ったかの如く、
172	玉膚花貌如彼毀	玉のような肌、花のような顔がこのようにやつれたとは。
173	千悲萬恨臆先塞	幾度となく嘆き恨み、胸が塞(ふさ)がり、
174	夫復何言時運否	これ以上何をいおうか、時運ではないのに、
175	搖搖[89]病體依三木[90]	ふらつき枷(かせ)にはめられた傷だらけの体で、
176	泣說中間事終始	泣きながら、事の始まりを一つ一つ説明していく。
177	郎君去後小妾願	君が去った後、妾(わたくし)の願いは、
178	富貴南還日夜俟	富貴な身で戻ってこられるのを日夜待っておりました。
179	紅氈明月宰相門	紅い絨毯(じゅうたん)、月の明るき宰相のお宅で、
180	食肉終身吾亦恃	一生肉の御飯を食べられると、私もまた信じていました。
181	前生作何至重罪	前世に何をして、この世で重罪になったのか、
182	百殃纏身無一祉	ありとあらゆる災いが身に降りかかり、何の福もなし。
183	如君才器此世界	この世で君ほど大きい器の方が、
184	弊袍南來實不揣	ひどい身なりで南原にいらっしゃるとは考えもせず。
185	華冠麗服倘無分	華冠、麗服には縁もなく、
186	百結鶉衫半泥滓	つぎはぎだらけの上着は半分泥まみれ。
187	誰令無罪致死地	罪もないわが身を、誰が死地に追いやるのか、
188	卽今官司只貪鄙	すなわち、今の官員たちは貪慾(どんよく)で卑しい。

189	脅民俱被剝膚患	百姓たちを脅して肌を剥ぐように、
190	廉恥渾忘飾簠簋[91]	廉恥もなく、あらゆる物を奪っていく。
191	張湯[92]後身木强人	張湯の後身か、木石のような奴等、
192	鍛錬[93]規模等鑪錘	ひどい拷問の仕方は容赦なく
193	人情全沒對獄時	獄死のときに、人情は全くなく、
194	殘忍其心若豺兕	殘忍なその心は狼のようである。
195	居然生慾有夫女	こっそり夫ある女に欲情をいだくとは、
196	白日風稜[94]肆姦宄	真っ昼間から力ずくで淫乱なまねをする。
197	嚴威莫奪匹婦節	権力を盾に匹婦の節を奪おうとは、
198	憤氣撐腸雙掌抵	怒りが五臓に達し、両手にまで至る。
199	如霜號令乳虎[95]吼	秋霜のような号令は母虎が吠える如く、
200	彷彿盲人足踐屎	盲人が糞を踏むさまを彷彿させる。
201	蜂飛邏卒[96]袒裼來	飛び回る蜂のように邏卒たちが腕捲りをして、
202	無數中庭雁鶩峙	中庭に立ち並ぶ雁や家鴨のよう。
203	三稜棍朴[97]積如山	三角の棍棒が山のごとく積まれ、
204	檢杖聲中魂已褫	棍棒を打ち数える中で、気を失った。
205	柔皮軟骨暫時碎	柔らかな骨皮はすぐに砕けたか、
206	滿脛瘡痕皆黑痕	脛は疵だらけ、みな黒あざになった。
207	梅樽日醉五斗酒	梅花酒、日々五斗の酒に酔い、
208	輒曰加刑不知止	いきなり刑を加えよと、止まるところを知らず。
209	羅裳染盡杖頭血	棍棒で打たれ、流した血で絹のスカートは赤く染まり、
210	署月虫蛆生股髀	六月で、うじ虫が股の辺りにわいてくる。
211	生於娼妓賤微地	娼妓に生まれ、卑しい身だが、
212	非昧褰裳涉溱洧[98]	裳裾たくしあげ、溱洧涉る愚かものにあらず。
213	方知烈女不更二	烈女なら不更二夫を知り、
214	許身當初以死矢	身を許す当初から、死を覚悟した。
215	投身湯鑊[99]尙且丹	煮立った釜の中に身を投げようとも一片丹心は、
216	本性難回柳與杞[100]	杞柳の如く、本性は変え難し。
217	村盲昨迅[101]夜來夢	村の盲人に昨夜の夢を訊ねたら、
218	天命無常云顧諟	天命とは無常なもの、心しなさいと云う。
219	粧臺鏡破豈無聲	化粧鏡が割れればどうして音がしないことがあろうか、
220	庭樹花飛應結子	庭の樹花が飛べば落ちたところに実を結ぶもの。
221	朝鮮通寶擲錢占	朝鮮通宝を投げて占うに、

222	伏乞神明[102]昭示俾	天地神に伏し乞いながら詳細を示す。
223	重天乾卦[103]動青龍	重天乾卦では青龍を動かし、
224	貴人相逢云可企	貴人に出逢うだろうという。
225	浮雲千里遠外郎	浮雲千里の彼方にいる君、
226	不意今來逢尺咫	不意に今会いに来たなんて。
227	身今溘死更何恨	この身は今死んでも何の恨みもなく、
228	如服良劑痊宿痞	良薬を服して長患いがすっかりなくなったよう。
229	間關行路得無飢	険しい道をいらっしゃって、お腹はすきませんでしたか。
230	且留吾家歸莫駛	わが家に留まって、ゆっくりなさってください。
231	輕花寶裙置諸篋	宝物だったスカートはタンスの中あり、
232	蘇合香囊藏在匭	蘇合香(そこう)の巾着は箱にしまってある。
233	呼吾老母向市賣	私の老母に頼んで市場に売りに行かせ、
234	一飯宜炊廚下錡	釜に飯を焚いてくれとおっしゃってください。
235	明朝本府壽宴開	明朝は本府で長官の誕生日の宴(うたげ)ですが、
236	醉後狂心應不罷	酔った後の狂った心、ただ事では済みません。
237	如將瘡上復加杖	傷ついた体を、また棍棒で打たれたら、
238	此身分明塵土委	この身が塵土(じんど)となることは明らか。
239	須從拿路護我械	引き回され、屍(しかばね)がさらしものになったら、
240	一番生前頭角掎	まず頭だけでも治めてください。
241	初終斂襲[104]以郎手	君が手ずから葬って、
242	埋骨荒原爲作誄	荒野に骨を埋めて、祭文(さいぶん)を作ってください。
243	剛腸[105]自以丈夫許	強いて気丈に振舞っていたが、
244	聽此不覺胸如燬	これを聞いて、胸に火がついたようになった。
245	心中切齒黑倅罪	憤(いきどお)りで歯軋(ぎし)りし、おのれ罪人、
246	封庫[106]來朝可擠彼	明日、やつを捕まえてやる。
247	娘家是夜伴燈宿	春香の家で、灯火とともに一夜を明かし、
248	蕭瑟[107]虫聲壁間嘻	秋風が吹き、虫の声が壁の隙間から聞こえる。
249	天明府庭果開晏	明朝、南原では官庁で宴が開かれ、
250	紅紬黃衫萬舞比	赤い紬、黄色いかざみが、あちこちで舞う。
251	腥鱗[108]白膾蓼川魚[109]	鮮魚、白く光る膾(なます)は蓼川魚(よちょんうお)か、
252	珍果紅登燕谷市[110]	珍しい果実、真っ赤な柿は燕谷柿(よんごくがき)。
253	牋花簇簇八蓮開	造花があちこち飾られ、
254	水卵團團棊子纍	碁石(こいし)のように丸い水卵(おとしたまご)があちこちに。

255　盃樽餘瀝醉飽心　酒樽の酒を酔うほどに飲み、
256　遂臭諸人等舐痔[111]　接待に酔いしれ、長官にぺこぺこする。
257　欄頭任實縣監憑　欄干には任実県監（イムシルヒョンガム）がもたれ、
258　楹角淳昌郡守倚　柱の横には淳昌郡守（スンチャングン ス）が寄りかかる。
259　安知竈突[112]火暗燃　竈王（そうおう）の火が密かに燃えていることも知らず、
260　鷰賀中堂歡未已　招待客らは中堂で歓喜の真っただ中。
261　公門以外乞食客　公門の外に乞食姿の客が来て、
262　襤褸布巾來自垝　汚れた服で垣根を越えてくる。
263　綿絲一紽亂結冠　綿の粗布で冠を乱して結び、
264　草履雙綦半掛趾　草履二足、紐（ひも）を半掛けに結んでいる。
265　低回末席故穎頤　末席で落ち着きなく、頬杖をついて坐ったが、
266　意中秋鷹將獵雉　その心は、秋の空飛ぶ鷹（たか）が雉（きじ）を狙っているよう。
267　平原門下笑躄姬　広場、門の下では女たちがクスクス笑っている。
268　復見樽前傳酒婢　よく見ると樽の前で酒を運ぶ女たちだ。
269　殘盃冷炙草待接　残り物の盃と肴で乞食を接待し、
270　彷彿村氓浮鬼庋　村民たちの鬼払いの祭祀のようである。
271　躬逢勝餞[113]豈不謝　接待を受けたのに謝礼しないでいられようか、
272　一聯新詩藏奥旨　試しに詠んだ漢詩一首に深い意味をこめる。
273　千人有淚燭燃蠟　燃え落ちる蝋燭（ろうそく）は千人の涙であり、
274　萬姓無膏樽泛蟻　百姓は痩せ細り、酒樽に浮かぶ蟻のよう。
275　雲峰營將獨有眼　唯一、雲峰令監（ウンポンヨンガム）は見識があり、
276　見水能知沙岸圮　水を見て、岸砂が崩れることを知る。
277　長風一陣自飣來　宴もたけなわ、突風が一陣に吹き、
278　意外玄門[114]馬牌捶　思いがけず、玄門に馬牌（マペ）をかかげ、御史のおなり。
279　青坡驛卒大叫入　青衣の駅役人どもが大声で叫び入り、
280　暗行使道臨於此　暗行御史がここに登場する。
281　晴天無乃霹靂動　晴天の霹靂とはこのこと、
282　四座蒼黃風下靡　四方に坐っていた客はあわてふためきよろめく。
283　爭投窓隙倒着冠　我先に窓の隙に身を投げ、冠を後ろ前にかぶり、
284　或蹴盃樽忙失匕　或は樽盃（たるさかずき）を蹴り、匙を失い呆然とする。
285　風威高動執斧虎[115]　威風も堂々、斧をふるう虎のように、
286　主官翻同牢下豕　囲いの中の豚のように長官を引きずり出す。
287　群鷄叢裡降仙鶴　鶏の群れの中に、仙鶴（せんかく）が降りたようで、

288	高踞中軒一交椅	中軒にある高い椅子に坐る。
289	三盃藥酒進次第	薬酒三杯が次々と出て、
290	八帖銀屏列逶迤	八帖の銀瓶、ずらりと並べられた。
291	綿裘竹纓去無痕	ぼろ服と粗末な冠は跡形もなく、
292	麟帶[116]烏紗俄忽侈	突然、紗帽(サモ)冠帯の豪華な姿。
293	瀛州十閣[117]坐仙官	瀛洲十閣(えいしゅうじっかく)に仙官が坐したよう、
294	栢府[118]威儀冠以豸	威厳堂々と御史台に居る。
295	軍牢使令[119]走如飛	軍卒と使令たちは飛ぶように走り、
296	卽地風威生倍蓰	さらに威風を地に吹かせる。
297	官員奔竄左右徑	官員たちは左右に隠れてしまい、
298	妓女俯伏東西戺	妓女たちは東西の地面にひれ伏している。
299	倉羊邑犬亦戰股	その様(さま)は羊と犬が恐れるあまり糞尿をして、
300	疑是昆陽[120]兩下溢	昆陽の溢水(ちすい)の如く両方に流れるが如く。
301	便宜南邑處置事	南原の事務処理は便宜を図り、
302	先屆封章[121]呈玉几	王様に封章して、ありのまま上告せよ。
303	張綱[122]直聲動洛陽	張綱のような厳かな声が洛陽(みやこ)にとどろき、
304	伏波神威震交趾[123]	伏波(ふくは)のような擺撥馬(パバルマ)の発令が敎旨された。
305	烹阿舊律本官罪	長官の罪は法によって裁かれ、
306	無異秦嬰[124]繫頸軹	秦嬰(しんえい)が車軸で首を絞めたのと同じ。
307	如何無罪久滯囚	無罪な人を長らく獄におくのか、
308	當刻圜墻其禁弛	今すぐ獄中から釈放してやるように。
309	圜墻玉娘忽官階	監獄の獄卒たちは階段の前で判決を待ち、
310	小庭花陰未假徙	小庭の花陰をせかせかと動いている。
311	桁楊[125]接摺使齒決	解き離してやれと命ずると、
312	衆妓尖脣穿似蘂	妓生たちが口を尖らせざわめく。
313	如痴如夢喜不勝	これは夢か幻か、嬉しいことこの上なく、
314	未覺中階迎倒屣[126]	履物もまともにはかず、中段で迎えられる。
315	千般好官別星我[127]	良き官職の暗行御史が私で、
316	九死餘生佳妓儞	九死に一生を得た美しき妓生が春香(なんじ)。
317	雙龍畵帖半月梳	双龍文様(そうりゅうもんよう)の半月の櫛、
318	十二雲鬟催櫛縱	乱れた髪を梳(けず)るよう促(うなが)す。
319	誰知昨暮丐乞行	誰が知っていましょうか、昨夜の乞食が、
320	飛上公堂官爵敉	今ここに坐っていらっしゃる立派な君だと。

321	京師去時一總丱[128]	京師(ソウル)に去ってしまわれた総角(あげまき)の君、
322	白皙疎眉[129]玉色玭	美しい眉に、白いお顔が玉のよう。
323	東軒資婢[130]極可嗤	官婢でも決心を固くし、
324	兩班書房其樂只	両班の書房(だんな)と出逢えば、それが楽というもの。
325	粧樓光彩一時生	妓楼も一時華やかさを増し、
326	卽日歡聲動南紀	その日、喜びの声が南原にあふれた。
327	油然[131]笑靨淺深情	自然とほころぶ笑み、その喜びの深さは、
328	請量東溟波瀰瀰	東海(トンヘ)の波で量られよ。
329	從今妓籍割汝名	今こそ妓籍から汝の名前をなくし、
330	百年吾家歸奉匜	一生、わが家で嫁として暮せるようにしよう。
331	禾花寶紬裂爲帶	宝の紬で帯を作り、
332	卽羽輕紗縫作被	羽ばたくように軽い刺縫(さしぬい)の布団を作りましょう。
333	珠欄玉簾所居室	珠の欄干、玉の簾(すだれ)の部屋に住み、
334	復欲西郊營好畤	西郊に出て畑を耕して暮しましょう。
335	官廳支廳六時饍[132]	官庁、支庁、六時の膳に、
336	跪進珍羞烹野麂	野鹿、珍味をあつらえましょう。
337	清醪樽上泛葡萄	清酒の樽の上に葡萄を浮かべ、
338	甘蜜盃中和薏苡[133]	豊潤な酒の盃に鳩麦を入れる。
339	絲絲細切鎭安草	糸のように細く切った鎭安(ジナン)の煙草
340	分付官奴其貢底	官奴に頼んで贈るように頼む。
341	三門[134]外街沸如羹	三門の外街は、羹(あつもの)を沸かしたようで、
342	六房[135]陰囊撑似枳	六房の陰嚢(わいろ)は枳(からたち)の如くぎっしり引き出される。
343	如天驛路路文[136]飛	天の如く駅路に公文書が行き交い、
344	有女同車歸竝軌	春香とともに車に並び乗って帰ってきた。
345	雙轎[137]青帳半空擧	駕馬(かご)の青い帳(とばり)が空に挙げられ、
346	兩耳生風驅綠駬[138]	両耳には馬を走らせる爽やかな風が吹く。
347	吹鑼六騎響前後	六騎のラッパの音が前後に響き、
348	清道雙旅影旖旎[139]	清い政治が讃えられ、双龍の旗がはためく。
349	監官邑吏設供帳[140]	官衙(かんが)の邑吏(むらやくにん)たちが帳(とばり)を準備し、
350	座首軍校執鞭弭	長官補佐、兵卒たちが鞭(むち)と弓を執る。
351	長羈短轡夾路馳	長い手綱(たづな)、短いくつわが、狭い道を駆けていき、
352	使客之行卿相儗	その姿は宰相が行くのかと思うほど。
353	花客之女玉貌郎	花の美少女、紅顔の美少年、

354　望若神仙同渡泚　神仙が渡っていくよう。
355　傾城傾國[141]月梅女　絶世の美女、月梅の娘は、
356　百譽喧喧無一譏　皆に誉め称えられ、一つも譏(そし)りなし。
357　夫人貞烈好加資[142]　貞烈夫人に命ずるが良いと、
358　敎旨踏下金泥璽　教旨がおり、金箔(きんぱく)の印が押された。
359　床琴並和室家慶　夫婦が仲よく、家内平穏で、
360　拜謁廟堂祖考妣　廟堂(びょうどう)に拜謁し先祖の祠堂(しどう)にお参りする。
361　銀臺[143]玉堂貴閥女　銀台、玉堂の門閥の閨秀(けいしゅう)たちは、
362　同姓同門作妯娌　同姓同門の嫁同士として仲よくする。
363　門楣[144]亦高老嫗家　良家の舅姑にも良く仕え、
364　孝誠堪稱同虎雌　その孝と誠は虎雌(とらさる)と同じく甚だしく讃えられた。
365　纖葱玉手坐無事　玉のような細手で事なく坐り、
366　不使春田勞採芑　自ら春畑で芑(もちあわ)を採(と)る。
367　盈盈玉粒共案食　あふれんばかりの白米で食事し、
368　分命家奴田器庤　家の下人には農機具を手入れするよう命じる。
369　金屛內室貯紅玉　奥に飾った金の屛風と紅玉を置き、
370　門對終南石磈硊　門は南山に対しており、奇岩怪石を眺める。
371　能文又是等薛濤[145]　すばらしい文才はまるで女流詩人の薛濤(せつとう)、
372　尤物元非似妹嬉[146]　まして妲己(だっき)のようなものとは似ても似つかない。
373　春花秋月合歡酒　春の花と秋の月には合歓酒(ハップァンジュ)、
374　玉壺金瓶釀黑秠　玉壺(ぎょっこ)、金瓶(きんぺい)にはきび酒。
375　泉源淇水[147]不盡思　故郷(ふるさと)南原への思いは尽きず、
376　時望南湖頻陟圯　時に湖南(ホナム)を思いだし、しばしば丘に登る。
377　嬌姿爾有笑中香　あでやかで、笑う姿は芳しく、
378　貴格吾誇眉上痏　尊き君は我が誇る眉の上の疵。
379　蛾眉好砂誥軸峰[148]　目の前には美しい砂と山峰、
380　人賀先山山峁嵬　人が先祖の墓をよく守ったと慶賀する。
381　宜春進士女僧歌[149]　春の進士が女僧歌を歌うように、
382　佳約何年逢杜渼[150]　佳約を結んだ美人といつ杜渼(トミ)で逢うのか。
383　狂心好色世或譏　好色の狂った心と世でまた譏(そし)るが、
384　度外讒言同伯嚭[151]　思いがけない讒言(ざんげん)は伯嚭(はくひ)と同じ。
385　當來好爵領議政[152]　将来の官職は領議政(ヨンイジョン)にもなるだろう。
386　不羨區區楚司烜[153]　苟(いやしく)も楚の官職を羨むものか。

387	星山玉春總無色	星山(ソンサン)の美しい春ですら色を失う、
388	嘗得櫻脣甘似酏	さくらんぼのような唇は甘い酒の味。
389	清霄東閣樂鍾鼓	晴れた日には東閣で鐘や太鼓を楽しみ、
390	遲日南園採芣苢[154]	日が長い春には畑で芣苢(おおばこ)を摘(つ)む。
391	朝雲[155]可愛還相隨	朝雲(ちょううん)のように愛らしく随従し、
392	孟光[156]甘心共耘耔	孟光(もうこう)のように耕作し鼓を打ち鳴らす。
393	醫娥棉婢愧欲死	妓生の娘が貞節を守ろうと命をかけ、
394	檀屑氷床[157]輕步躚	多くの苦節に耐えてきた。
395	先稱絳桃[158]花不發	先(ま)ず紅い桃の花は咲かずというが、
396	更詠周詩江有汜[159]	更に周の詩である「江有汜(こうゆうし)」を詠む。
397	奇談秖可詠於歌	奇談は歌に詠むべきで、
398	異蹟堪將繡之梓	異蹟を綴(つづ)らずはおられまい。
399	騷翁[160]爲作打鈴辭[161]	この翁が打鈴辞(タリョンサ)を作ったので、
400	好事相傳後千祀	千年の後までも、良き事が伝えられるように。

注

1　『春香伝』の異本とその特徴については、拙稿「『春香伝』の「日本的改変」について」(『近畿大学法学』第58巻第2・3号、近畿大学法学会、2010)、이응수・윤석임・박태규「일본에서의 <春香伝> 수용 연구」(『日本言語文化』第19号、ソウル：韓国日本言語文化学会、2011）参照。なお「일본에서의 <春香伝> 수용 연구」では、1882年から2011年まで日本語に翻訳された『春香伝』の異本を、小説と戯曲・オペラのジャンル別に分けて記してある。

2　歌辞体の『春香伝』は2006年に発掘された資料で、1900年4月に作られたことが推定されている。구사회・이수진・양지욱「새로 발굴한 가사체 <춘향전> 에 대하여」『東洋古典研究』第34輯（ソウル：東洋古典学会、2009）390～391頁。

3　李樹鳳『晩華本春香歌와 龍潭録』（ソウル：景仁文化社、1994）52頁。柳振漢は朝鮮後期の詩人。字は重伯、号は晩華堂。官職には就かず、地方に隠居しながら暮したが、その詩才によって多くの称賛を受けた。1753年に湖南地方に遊覧し、1754年の春に帰還し、『春香歌』を作ったが、時の儒者たちの譏りを受け、そのことが柳振漢の息子である栞の『家庭見聞録』に記されている。姜慶鍋 編著『열여춘향슈졀가 春香伝研究』（ソウル：教学研究社1990）14頁。

4　200 聯 400 句の内容を大まかに分けると以下のようになる。1 ～ 10 句、前置き部分。11 ～ 44 句、男女が出会う場面。45 ～ 76 句、春香の家に行き、二人が結ばれ歓喜を尽くす場面。77 ～ 98 句、別れの場面。99 ～ 122 句、李道令が科挙に合格し、暗行御史に任命される場面。123 ～ 164 句、李道令が都から南原へ行き、春香の家を訪れる場面。165 ～ 248 句、獄中での春香との再会場面。249 ～ 276 句、南原官庁での宴の場面。277 ～ 328 句、暗行御史登場の場面。329 ～ 354 句、その後の南原官庁とソウルへの帰還場面。355 ～ 400 句、春香が貞烈夫人に叙され、幸せに暮らす場面である。

5　暗行御史は朝鮮時代、地方行政や民衆生活を秘密裏に調査するために、国王の命令を受けて派遣された臨時職である。王の側近で、正三品、通訓大夫以下の堂下の者が任命され、その証拠として常に駅馬や駅卒使用のための馬牌（マペ）を持っていた。漢武帝が地方に御史を送る際、繡衣（スイ）を与え、特別待遇をしたことに由来する。

6　日本語訳では主に小説や、戯曲、パンソリとして訳されている。詳細は이응수・윤석임・박태규の前掲論文 553 ～ 554 参照。戦後の代表的なものとしては、許南麒『春香伝（岩波文庫、赤 73-1)』（岩波書店、1956)、申在孝著･姜漢永･田中明訳注『パンソリ（東洋文庫 409)』（平凡社、1982）がある。これらは申在孝本を底本としており、いずれも完板系である。京板系としては宇野英彌『烈女春香守節歌･京板春香伝（朝鮮文学試訳 18 古典 3)』（自家出版、国立国会図書館所蔵、1978）がある。

7　金東旭『増補春香伝研究』（ソウル：延世大学校出版部、1976）
金東旭「晩華本 < 春香歌 > 研究」『판소리연구』2（ソウル：판소리학회、1991）

8　晩華本『春香歌』の朝鮮語訳には次のものがある。
韓国古小説研究会編『春香傳의 綜合的 考察』（ソウル：亜細亜文化社、1991）
柳振漢・김석배訳注「晩華本春香歌」『판소리연구』3（ソウル：판소리학회、1992）
李樹鳳「春香歌 < 二百句押支韻의再試訳 >」、前掲書、36 ～ 51 頁（韓国古小説研究会編『春香傳의 綜合的 考察』亜細亜文化社 1991 所載の再試訳）
설성경「18 세기 유진한의 한시 춘향가와 그 주제」『춘향 예술의 역사적 연구』（ソウル：연세대출판부、2000）また、語注としては、김석배訳注の他に、以下のサイトも参考にした。전홍철「晩華本春香歌」<http://blog.daum.net/quanhz/7320861>（2014.10.15 アクセス）添付ファイル「만화본춘향가［1］.hwp」

9　柳浚景「晩華本『春香歌』研究」『冠嶽語文研究』第 27 輯（ソウル：ソウル大學校國語國文學科、2002）柳浚景「漢文本 < 春香伝 > 의　作品世界와　文学史的位相」（ソウル：ソウル大學校國語國文學科文学博士論文、2003）

10　김석배「< 만화본 춘향가 > 의 교감과 번역상의 문제」『어문학』第 107 輯（ソウル：어문학회、2010）

11　現在、韓国国立ソウル大学校中央図書館に所蔵されている。

12　清節書院本には巻之一に晩華集序、晩華集目録、巻之二には「劉翰林迎謝夫人告祀堂歌、銀寺同遊詩軸序、祭舎弟文」が入っているが、それ以外は一蓑本と同じ内容である。『春香歌』はどちらも巻之二に収録されている。清節書院本の巻之三は「輓詞、祭文、行録、墓碣、年譜、跋」があり、この巻は一蓑本にはない内容である。

13　一蓑本との異同に関しては김석배の上掲論文に22か所が指摘されている。全て語彙レベルであり、両本ともに誤字と思われる箇所も存在する。日本語訳を試みる際、李樹鳳の前掲書191～206頁に影印されている清節書院本を参照し、便宜上一句ごとに番号を振った。また具滋均校註『春香伝（韓國古典文學大系10)』（ソウル：民衆書館、1970）の活字本や、注8にある朝鮮語訳や語注も参考として日本語訳および訳注をおこなった。

14　二百句とあるが、実際は二百聯である。

15　この「押支韻」という言葉は一蓑本にはない。押韻とは、二つ或は二つ以上の語の音が母音およびそれにつづく子音を同じくすることで、五言詩においては隔句韻を原則とし、七言詩もほぼこれに準ずる。また一般的に朝鮮時代における漢詩の韻は、宋代の『廣韻』を踏襲している。ここでの押支韻とは、偶数句において「支（zhī)」の韻、すなわちi音で終わっていることをさす。具体的には「爾、妓、喜、美、是」以下、偶数句の最後の字などがそれに該当する。しかし、20句目に蛙（wā）などの文字も混ざっており、それ以降の句を見ても、必ずしも韻を踏んでいるわけではない。なお、古詩通押の支部にある推定中古音にはi音の他に、「ie,wie,wi,ei,wei」の音があったとされる。小川環樹『唐詩概説（岩波文庫、青N109-1)』（岩波書店、2005）208～210、217、218頁。

16　韓国全羅北道南原市川渠洞にある朝鮮中期の木造建築。

17　繡衣郎（スィラン）とは暗行御史をさす。

18　南原府の客舎、すなわち官舎である龍城館をさす。『龍城誌』収録の「南原官府圖」に詳しい位置が載っている。東大庁とは官舎の東にある板張りの大広間をさす。

19　唐の玄宗の幼名。

20　『淑香伝』の男主人公、李仙。

21　李都令と春香の年を表す。

22　南原の昔の名称。

23　旧暦三月三日をさし、山などに出かけ、朝鮮つつじで花煎（ファジョン）（もち米をこねて薄く丸く延ばし、つつじの花を上に置いて焼いたもの）を作って楽しんだりする。

24　ここでは赤いチマ、すなわち韓服のロングスカートが草の緑と対比をなしている美し

い様子を描いている。

25　美女とされる麻姑仙女をさす。

26　月宮姮娥をさす。

27　佩玘とは韓服の装飾品であるノリゲをさす。

28　鞦韆（ぶらんこ）は婦女子たちが楽しむ朝鮮の伝統的な遊びの一つである。

29　纚纚とは長く伸びて色がきれいな様子。

30　揚子江の神女。

31　寶襪とは韓服の足袋であるポソンをさし、つま先が尖って曲線がある。

32　西王母の使者、転じて恋のキューピッドをさす。

33　ここでは李都令が春香の家を尋ねる場面である。以下の春香の部屋の様子や二人が盃を交わし百年佳約を誓う場面は多くの異本に登場する内容である。

34　洞房とは新郎新婦が初夜を迎える部屋。

35　櫛比のことをさす。김석배、前掲論文、167 頁参照。

36　不忘記とは、生涯忘れないことを約束した契紙をさす。異本によっては不忘記を書く場面がないものもある。

37　『詩経』唐風「綢繆」の「今夕何夕、見此良人、子兮子兮、如此良人何」による。

38　禹王は結婚した 4 日後には治水のために婚家を離れなければならなかった。結婚当日も含めて妻と一緒に暮らしたのが、辛日、壬日、癸日、甲日の 4 日間であった。ここでは禹王を引き合いに出して、縁を結ぶのに吉日であることを示している。辛日、壬日、癸日の 3 日間を指しているのは、結婚の際の 3 日間を妻の家で暮らし、その後は夫の家に戻るという朝鮮の婚姻風俗によるものといえよう。

39　宋玉「高唐賦」の「旦為朝雲、暮為行雨」による。楚臺とは楼閣である高唐、香雲とは朝雲をさし、楚の懐王が高唐に遊び、疲れて昼寝をした時、夢で巫山神女と出逢い、朝には雲になり、暮れには雨になって交わったことにちなむ。

40　風度とは風采や態度をさす。

41　この 67 句から 70 句まで李道令が春香に与えた贈り物が叙述されている。

42　倭舘市とは朝鮮時代に日本人が通商した所。初期には三浦（釜山・昌原・蔚山）とソウルに置かれたが、中宗 7 年（1512）壬申約條の際、薺浦（昌原）のみに置かれた。その後中宗 36 年（1541）に釜山浦に移され、粛宗 4 年（1678）年に草梁に移された。柳振漢・김석배訳注、前掲論文、331 頁参照。倭館の設置は 1407 年の富山浦（釜山）と乃而浦（昌原）と 1426 年の鹽浦（蔚山）に始まり、この三箇所を三浦と称す。

43　黒光りのする赤銅。

44　内衙とは地方長官の家のことで、李道令一家が住む場所をさす。

45 『詩経』周南「樛木」による。

46 瓜満とは任期が終わることをさす。『春秋左氏伝』「荘公」の故事による。

47 五音である「宮・商・角・徵・羽」の羽と徵で、ここではその曲調の歌を意味する。

48 濟州將とは済州島の妓女にうつつをぬかし上京の別れ際に女に請われるままに自分の歯を抜いて送った裵裨将のことをさす。朝鮮古典小説では滑稽談として広く知られている。

49 慰勉とは慰労と激励をさす。

50 明廷すなわち明府、太守や県令の尊称で、官吏になることをさす。

51 南俗俚すなわち「黄鶏詞」をさし、男と別れた女の悲しみを黄鶏に託した歌詞（歌曲）である。九五句から九八句はその内容を漢詩で表してある。『春香伝』の異本の一つである『南原古詞』には「金剛山、最高峰に、水が押し、舟がプカプカ、浮いた後、平地になっても、来てください、屏風に、書かれし黄鶏（とり）は、翼バタバタ、ばたつかせ、丑三つ時、夜更けの後に、飛ぶ黄鶏（とり）が、コケコッコー、鳴いたとしても、来てください（訳は筆者）」と載せられている。「黄鶏詞」は、十二歌詞の一つで、十七世紀後半に成立した『九雲夢』以降の作品とされ、『青丘永言』（1728）や朝鮮の俗謡を編集した『楽府』に伝わる。十二歌詞と称されるようになったのは19世紀以降ではないかとされ、李賢輔の「漁父詞」以外の「白鷗詞」「竹枝詞」「黄鶏詞」「春眠曲」「相思別曲」「勧酒歌」「處士歌」「襄陽歌」「首陽山歌」「梅花打令」「行軍楽」は作者未詳である。

52 方壺、すなわち方丈、東海にある三神山として知られる知異山（チリサン）をさす。知異山は南原市にあり、全羅南北道、慶尚南道にまたがる山である。

53 蛟龍山とは南原の西側にある山をさす。

54 瑟峙は全北任実郡にある峠をさす。

55 斗峙は全北任実郡にある峠をさす。ここでは、韋應物「寄李儋元錫」の「世事茫茫難自料、春愁黯黯獨成眠」によるか。

56 美人の寝室、すなわち妓楼。

57 ソウル鐘路区の平倉洞をさす。

58 開墨壘とは科挙の模擬試験をさす。

59 風騒とは『詩経』の「風雅」、屈原の「離騒」をいう。ここでは詩文を味わい楽しむ意。

60 宋玉は戦国時代の楚の人。『楚辞』「九弁」で秋の物悲しさと孤独な心を詠んだ。

61 李悝は戦国時代の魏の政治家。民を飢えさせないよう富国の政策を考案した。

62 朝鮮王宮の一つである昌慶宮の中にある春塘台、王の御前で受ける試験を春塘台試と

いう。謁聖科は成均館で王が親臨して行なわれた特別試験で、当日に合格者が発表された。

63　文科の科挙で一番に試験用紙を提出することをさす。

64　及第は合格、壮元は主席を意味する。

65　王が酒席合格者に下賜する酒と花をさす。

66　翰林とは芸文館、奉教、待教、検閲をさし、王の側近の史官である。

67　宮中で歌舞を掌っていた機関で、唐楽と俗楽をひきうけていた。

68　芸台とは校書館、正字とは正九品をさす。

69　玉堂、すなわち弘文館をさす。

70　清班とは清官のことで、文明と清望のある清白吏という意味で、弘文館の官吏をさす言葉。

71　校理とは弘文館の正五品、校書館と承文院の従五品の位をさす。

72　集賢殿をさす。

73　行李とは行装を意味する。

74　行驂とは馬2頭を前に、1頭をその後ろにして、遠くまで走らせる馬車をさす。

75　罷漏とは朝鮮時代、夜間の通行禁止を解除するため、鐘を33回打つこと。

76　五院（オウォン）は烏原（オウォン）の誤記か。烏原は全羅北道にある地名。

77　獒樹は南原の北側、全羅北道任実郡にある地名。山火事から主人を救って死んだ犬の墓に立てた印が、樹木になったことから由来する。

78　戦国時代、魏の人。王子の怒りを買って拷問されたが、逃亡し、名前を変えて、卑しい身なりに扮して隠れていたとされる。

79　南原全域をさす。

80　若箇は推量の意を表す。どれほど、いかばかり。

81　阿娘を春香とする解釈に従う。異本によっては、阿娘を侍女の香丹とし、香丹が月梅を呼び出すと解釈するものもある。

82　棲遑は居場所がないことをさす。

83　圜扉は牢獄をさす。

84　潲灑はきれいな米のとぎ汁をさす。転じて父母に食事を与えることをさす。

85　虺蛇夢とは母月梅が春香を授かるときに見た吉夢をさす。

86　犢舐は子への愛を讃える言葉をいう。

87　鷃冠は山鳥の羽で装飾した冠。主に武官や隠士が使用した。

88　娉婷は婦人の美しい姿をいう。

89　搖搖は不安な様子をいう。

90　三木は首や手足を固定する枷(かせ)をさす。
91　簠簋は祭器をさす。
92　張湯は漢の杜陵の人で武帝に仕えた。幼いころからネズミの罪を裁いた文書を残し、獄を厳しく統括したことで酷吏とされた。
93　拷問を意味する。
94　風稜は風力、すなわち威力と暴力。
95　乳虎は子のいる雌虎で、普段より荒々しい。
96　邏卒は捕盗庁の下級官吏をいう。公の命を受けて罪人を逮捕する任務をおこなっていた。
97　三稜は三稜杖、すなわち三角の棍棒で、刑具として用いられた。
98　褰裳涉溱洧は淫乱な女性の姿をいう。『詩経』鄭風「褰裳」による。
99　湯鑊は煮立った釜をさす。
100『孟子』「告子」による。
101 清節書院本、一蓑本ともに「迅」となっているが、「訊」が正しい。김석배、前掲論文、169 ～ 171 頁参照。
102 神明とは、天と地の神をさす。巫堂の神がかり時の精神状態から由来する。
103 六十四卦の一つで、天が重なる事を象徴する。
104 死んでから死体を清め、服を着せ、布で包むまでの、一連の作法をさす。
105 剛腸とは強く屈しない心をさす。
106 封庫罷職をさし、官庫を封鎖し、悪政を行う長官を免職させること。
107 秋の風が寂しく吹く様子。
108 腥鱗とは調理前の鮮魚をさす。
109 蓼川は南原の東南にある川の名前。
110 知異山麓にある燕谷寺で生産している柿。
111 舐痔は権勢のあるものにへつらうことをさす。『荘子』「列禦寇」による。
112 かまどの煙突、ここでは懲罰されることを意味するか。中国の民間神話に張竈王の竈王祭りがある。
113 盛大な歓送会。
114 玄関にある出入り門。
115 斧虎は、斧と虎の模様をつけた御使の目印である衣服とする説もあるが、ここでは文脈から斧を持った虎と訳した。
116 麟帶は官吏の正装、烏紗は官服を着用時にかぶる冠。
117 神仙世界である瀛洲島にある楼閣。

118 栢府は司憲府をさす。
119 軍牢は軍隊で罪人をさばく兵卒。使令は各部署で仕事をしている官吏。
120 昆陽は中国戦国時代、魏の首都。
121 封章は上訴文をさす。
122 張鋼は後漢の人。御史になり厳格に事務処理をしたとされる。転じて厳格な様子。
123 伏波は後漢の人で、将軍の馬援をさす。ここでは公文書を届ける馬の発令がくだされたことを意味する。
124 秦嬰は秦の最後の王である秦王の子、嬰をさす。後に項羽によって処刑される。
125 桁楊は首枷、足枷の刑具をさす。
126 中階は家屋の基礎として積み上げられた階段で、倒屣とは履物もきちんとはかないまま急いで行くことをいう。
127 千般好官とは高官、別星とは奉命使臣すなわち李道令の任命職である暗行御史をさす。
128 總丱は少年の髪型をさす。ここでは李道令をさす。
129 美男をさす言葉。
130 東軒は地方長官の執務室、資婢は下女をさす。
131 感情が自然と表れる様。
132 支庁は官庁の本朝とは別に所在地の所管業務を行う。六時饍は一日の食事を6回に分けて出す膳。仏教では一日を6つに分けて念仏や読経を行う。
133 薏苡は鳩麦をさす。
134 宮殿や官庁の前にある門。正門、東夾門、西夾門がある。
135 承政院に属していた吏房、戸房、礼房、兵房、刑房、工房の六房をさす。
136 駅馬や食事の手配をするために、あらかじめ日程を村々に知らせる公文書。
137 前後2匹の馬で引いていく馬車籠。従2品以上の高官や要人だけが乗れた。
138 緑駬は周の穆王が乗っていた駿馬をさす。
139 旖旎は旗がなびく様子。
140 供帳は食事や休憩の際などに使用する幕をさす。
141 絶世の美女をさす。
142 加資は正三品以上の品階、またはその位を与えることをさす。
143 王命を掌る中央機関である承政院をさす。
144 門上にある横木をさす。高い門楣とは良い家門を意味する。
145 薛濤は中唐の詩妓として名高い。
146 尤物は絶世の美女をさす。妹嬉は夏の帝桀の妃の末喜をさす。その美と淫乱で王を惑

わし、国が滅んだ。

147 泉源は中国衛州の共城にある百泉で、淇水は河南省の北方にある。『詩経』「竹竿」による。ここでは春香の郷愁を表している。

148 軸峰は衡山の最高峰で、忠清南道扶余郡にある祝融峰をさす。

149 女僧歌とは女僧とそれを思慕する男の気持ちを歌ったもので、あの世の極楽浄土で会う約束する内容となっている。送女僧歌、僧答辭、再送女僧歌、女僧再答辭ともいわれる。

150 杜渼は現在ソウルの玉水洞付近をさす。

151 伯嚭は呉の夫差時代の宰相。賄賂と美人を受け取った伯嚭は最後に殺される。

152 領議政とは正一品の最高位で現代の総理大臣に当たる。

153 楚司烜は楚の官職名。

154『詩経』周南「芣苢」による。

155 蘇軾の妾で、錢唐の妓女だった王朝雲をさす。蘇軾が惠州へ左遷された時、多くの妾達が去って行ったが、ただ朝雲だけが残った。

156 孟光は梁鴻の妻。常に夫を敬愛し、自ら杓子を取って御飯を盛りつけ、眉の上に捧げ持ったことから「挙案斉眉」「斉眉の礼」という言葉が生じた。

157 氷床は雪が降る時、土の上に生じる氷、転じて霜。

158 絳桃は紅い桃の花をさす。他の桃より遅く花咲く。

159 江有汜は『詩経』召南「江有汜」による。「江有汜、之子帰、不我以、不我以、其後也悔（江に汜(し)有り、之の子は帰(とつぐ)ぐに、我れと以(とも)にせず、我れと以(とも)にせず、其の後や悔ゆ）」とあることから、男女の離合の奇異さを歌ったものか。一説には、「君主は一夫多妻であった当時の掟として、正夫人は嫁入りの際、一族の女性何人かを、副夫人としてひきつれてゆくのが定めであった。しかるにこの掟を無視して、ひきつれるべき女性をひきつれずに嫁入りした正夫人があったが、のち後悔して、かつておいてきぼりにした女性を、掟どおり副夫人として迎えとった。これは迎えとられた副夫人が、正夫人の改心をほめた歌」ともいう。吉川幸次郎『詩経国風 上（中国詩人選集第1巻）』（岩波書店、1958）86～88頁。これによれば、たとえ妓女であっても節を守れば、両班の妻として迎えるべきであることを説いたものか。朝鮮時代は賤民である妓女が支配階級である両班の妻となることは法的に不可能であった。妓女の身分については拙稿「朝鮮文学の花・妓女（妓生）- 日朝遊女比較論の前提として」『日本近世文学と朝鮮』（勉誠出版、2013）146～158頁参照。

160 騒翁は詩人を意味し、ここでは作者の柳振漢をさす。

161 打鈴辞とはある事物に対する心情を何度も繰り返して表した歌で、広くはパンソリ、

民謡、雑歌もさす。

参考文献

柳振漢『晩華集』（李樹鳳『晩華本春香歌 와龍潭録』収録、ソウル：景仁文化社、1994、清節書院本）
柳振漢『晩華集』（韓国国立ソウル大学校中央図書館所蔵、一蓑文庫本）
姜慶鍋 編著『열여춘향슈졀가 春香伝研究』（ソウル：教学研究社、1990）
구사회・이수 진・양지욱「새로 발굴한 가사체 < 춘향전 > 에 대하여」『東洋古典研究』第34輯（ソウル：東洋古典学会、2009）
具滋均校註『春香伝（韓國古典文學大系10）』（ソウル：民衆書館、1970）
金東旭『増補春香伝研究』（ソウル：延世大学校出版部、1976）
金東旭「晩華本 < 春香歌 > 研究」『판소리연구』2（ソウル：판소리학회、1991）
김석배「< 만화본춘향가 > 의　교감과　번역상의문제」『어문학』第107輯（ソウル：어문학회、2010）
설성경『춘향 예술의 역사적 연구』（ソウル：연세대출판부、2000）
柳浚景「晩華本『春香歌』研究」『冠嶽語文研究』第27輯（ソウル：ソウル大學校國語國文學科、2002）
柳振漢・김석배訳注「晩華本春香歌」『판소리연구』3（ソウル：판소리학회、1992）
이응수 , 윤석임 , 박태규「일본에서의 < 春香伝 > 수용 연구」『日本言語文化』第19号（ソウル：韓国日本言語文化学会、2011）
韓国古小説研究会編『春香傳의 綜合的 考察』（ソウル：亜細亜文化社1991）
吉川幸次郎『詩経国風 上（中国詩人選集第1巻）』（岩波書店、1958）
許南麒『春香伝（岩波文庫、赤73-1）』（岩波書店、1956）
宇野英彌『烈女春香守節歌･京板春香伝（朝鮮文学試訳18古典3）』（自家出版、国立国会図書館蔵、1978）
申在孝著･姜漢永･田中明訳注『パンソリ（東洋文庫409）』（平凡社、1982）
小川環樹『唐詩概説（岩波文庫、青N109-1）』（岩波書店、2005）
拙稿「『春香伝』の「日本的改変」について」『近畿大学法学』第58巻第2・3号（近畿大学法学会、2010）
拙稿「朝鮮文学の花・妓女（妓生）- 日朝遊女比較論の前提として」染谷智幸・崔官編『日本近世文学と朝鮮』（勉誠出版、2013）
参考ＵＲＬ
전홍철「晩華本春香歌」<http://blog.daum.net/quanhz/7320861>（2014.10.15 アクセス）